

近代の漢学

はじめに

近代の漢学とは、もちろん日本文化史における近代の漢学のことである。近代は第一期、幕末維新期（アヘン戦争・大日本帝国憲法・教育勅語発布）。第二期、大日本帝国憲法の時代（天皇主権・臣民の時代）。第三期、日本国憲法（主権在民・基本的人権）の三期に分けられる。

漢学の語義としては広義には漢民族・漢字文化の学問の意味であり、対概念は和学（国学・国史・国文・国語）である。ただし国学という概念は漢字文化圏の国では自国の学問を国学と呼称するので日本に固有のものではない。和学講壇

所などの例。日本の近代に於いても漢学の比重は大きかった。この流れは、略称して国漢と併称された。この流れは教育現場では国語の中に漢文が包摂されることになる。

吉田 公平

狭義では、中国の漢代の学問のこと。漢唐訓詁の学とも呼称され、その全盛期の学問を清朝考証学という。文献学・古典学であり、書誌学・文字学・音韻学・校勘学を本領とする。対概念は宋学である。宋明性理学ともいう。その特色は人間（心）とその本質（性）を問い、自力救済論と政治哲学を中心課題とする。清朝考証学の人々はこれを「大義を語る」ものと決めつけて、自らは禁欲した。

近代の漢学という場合には、講壇では狭義の意味で用いられるが、一般には広義の意味で用いられることが多い。

对概念として西学（西洋学）・和学が意識される。

近代になって学制が整備された。官学及び私学に職を奉ずる形で漢学を専門とする教育者・研究者が社会的地位をえた。

一 講壇の漢学者

講壇に職を得て活躍した漢学者については、『東洋学の系譜』（江上波夫編、一九九二年、大修館書店。那珂通世・林泰介・市村瓚次郎・白鳥庫吉・内藤湖南・高楠順次郎・河口慧海・服部宇之吉・狩野直喜・鳥井龍藏・鈴木大拙・桑原隲藏・岡井慎吾・津田左右吉・新城新藏・大谷光瑞・鈴木虎雄・加藤繁・濱田耕作・羽田亨・諸橋轍次・武内義雄・青木正児・石田幹之助）、『東洋学の系譜』第二集（江上波夫編、一九九四年、大修館書店。滝川龟太郎・藤田豊八・小柳司気太・常磐大定・今西訛・宇野哲人・池内宏・塩谷温・小島祐馬・小倉進平・原田淑人・鳥山喜一・石浜純太郎・和田清・梅原末治・橋川時雄・倉石武四朗・辻直四郎・神田喜一郎・長沢規矩也・前島信次・仁井田陞・吉川幸次郎・貝塚茂樹）に総計四八人が紹介されている。

また『東方学回想』一〜九（東方学会編、二〇〇〇年、刀水書房）に「先学を語る」として、市村瓚次郎・白鳥庫吉・古城貞吉・内藤湖南・服部宇之吉・村上直次郎・狩野直

喜・藤田豊八・小川琢次・桑原隲藏・藪内巨・辻善之助・鈴木虎雄・塩谷温・池内宏・藤塚鄰・加藤繁・濱田耕作・小島祐馬・羽田亨・宇井伯壽・武内義雄・岡崎文夫・和田清・原田亮策・斯波六郎・久松潜一・楠本正継・田保橋潔・神田喜一郎・塚本善隆・岩生成一・坂本太郎・結城令聞・仁井田陞・吉川幸次郎・貝塚茂樹・鈴木俊・牧野巽・水野清一・周藤吉之・三上次男・小川環樹・榎一雄・井上光貞。「学問の思い出」として、矢野仁一・宇野哲人・藤原楚水・長井真琴・諸橋轍次・今関天彭・原田淑人・青木正児・那波利貞・竹田復・石田幹之助・梅原末治・宮本正尊・橋川時雄・加藤常賢・倉石武四朗・花山信勝・辻直四郎・曾我部静雄・小俣淳・江上波夫・長尾雅人・服部四郎・白川静・中村元・三笠宮殿下・秋山光和。総計七二人が紹介されている。

『東洋学の系譜』『東方学回想』共に貴重な記録だが、人選が東京大学・京都大学関係者に偏っている。また講壇で漢学を専門にしないものの、漢学を基礎教養として言論活動・教育活動に邁進したひと、例えば中村正直・穂積陳重・遠藤隆吉などが漏れている。この種のことをいえばきりがない。また『同人社文学雑誌』『漢学』『斯文』などの機関誌に関する基礎調査は全くの手つかずに近い。

二 民間の漢学者——漢学活動

民間の言論機関を活動の基盤にして活躍した人々、例えば徳富蘇峰や三宅雪嶺などの漢学活用の実態究明が待たれる。第二期には地域新聞が数多く発行された。この時期の漢学は中央論壇からは半ば独立してそれぞれの地域を拠点にして展開された。言論活動の場であった地域新聞の調査が自由民権運動の盛んであった土佐地域などを例外として、その他は未開拓である。新聞には「小新聞」（和文・戯作体）と「大新聞」（漢学漢文体が基調）があったが、「大新聞」を中心に蒐集を図った宮武骸骨の成果は今は「明治新聞雑誌文庫」に収められている。

漢学を基本理念とする民間の結社が機関誌を刊行して思想運動を展開した。活動基金は基本的には購読会員の会費である。読者層が飛躍的に拡大したと相俟って運動量は大きい。その総体はなお未解明である。便宜的にグループ分けしてその一端を紹介する。

一 朱子学系。大野雲譚主幹、『朱子学』。道学教会、『道学教会雑誌』（稲葉黙齋系・上総崎門学）

二 陽明学系。吉本襄主幹、鉄華書院、『陽明学』。東敬治主幹、『王学雑誌』、『陽明学』。石崎東国主幹、『陽明』

『陽明主義』。宮内黙藏・高瀬武次郎も機関誌を刊行した節が見られるが実相は不明。中心的役割を担った人物の基礎調査として次の拙稿がある。

「東正堂年譜稿」、『白山中国学』一一号、二〇〇四年一月。

「高瀬武次郎年譜稿」、『東洋大学井上円了センター年報』一五号、二〇〇六年九月。

「石崎東国年譜稿」、『白山中国学』一三号、二〇〇七年一月。

三 石門心学系。参前舍・明倫舎など。石門心学の活動は近代になって最も熱量が大きくなるが、近代における心学運動についてはほとんど未調査か。

四 禅心学系。仏教界は第一期は墮落停滞の極点にあった。基督教の衝撃、神道の国教化政策などの打撃を受けて、第二期は再生運動の時機である。仏教ルネッサンス。仏教漢学が走り出す。その一々については宗門のスターを顕彰するのではなくして運動論として究明することが課題である。禅心学も状況を回復するが広義の漢学の中に投げ込んで考察することが肝要か。宗門の財政力を基盤にしたが為か、機関誌の類が多い。それを一覽できる基礎調査がない。小生の寡聞のせい

思想運動としての漢学を結社に着目してみたが、狭義の漢学である古典学・考証学となると幕末期の狩谷液斎グループのような動きは民間では見られなかったのではないか。その意味では森鷗外の『北條霞亭』『洪江抽斎』は特別な作品である。

第二期における、民間の漢学運動のもう一つの特色は、漢学の基礎文献（漢詩漢文）が翻刻出版されたことである。思い浮かぶままに列挙する。『漢文叢書』（博文館・友朋堂・漢文大系・漢籍国字解全書・経書大系・四書注釈全書・芸林叢書・日本詩話叢書・日本陽明学・陽明学派・水戸学大系・日本倫理葬編・修養大講座・大正大藏経・大日本統藏経・日本仏教全書・曹洞宗全書など。また、これと並行して各種団体が特定の主義や先哲を顕彰することを目的にして、遺著遺言を調査蒐集して個人全集を刊行した。第二期における出版事業の成果が第三期の思想史研究に大きな便宜を供与していることを改めて想起したい。

三 漢詩文の結社

加藤国安著『漢詩人子規』（二〇〇六年、研文出版）は、近代俳句の仕掛け人である正岡子規が実は漢詩人であり、彼の俳句が漢詩と共鳴することを立証した名著である。しか

し、近代の文人が創作と鑑賞の両面において、漢詩と深い縁があることは正岡子規に限ったことではない。第二期の文人に共通して見られることである。そのことを如実に示してくれる最近作が『近代文人のいとなみ』（二〇〇六年、成田山書道美術館監修、淡交社）である。詩書画三題をこよなく愛した実作者たちの文墨の交遊ネットワークを基礎にした文人三昧の生活を紹介したものであるが、ここに取り上げられている五四人の人々は文人に踰踏したわけではない。生業が別にあつてのことである。文人という呼称は中国本場の漢学に由来するが、この文人に政治家・哲学者の二要素が加わると、士大夫読書人ということになる。中国の正統な知識人はこの士大夫読書人の範疇に属する。実は漢学を基礎的素養とした日本の文人も士大夫読書人の特色を併せ持つ。士大夫読書人から公的役割を捨象したのが文人である。マルチ型人物を詩書画三題に重点をおいて見るときに文人と呼称したにすぎない。『近代文人のいとなみ』においても鍵的人物として取り上げられている岡本黄石については『漢詩人岡本黄石の生涯』第一集、第二集が世田谷区立郷土資料館から刊行されている（二〇〇一年、二〇〇五年）。力作である。ここでは表題に「漢詩人」を用いているが、岡本黄石は漢詩人だけであつたのではない。彦根藩の中老役を仰せつかりながら、儒学を安積良斎にまなび、

書を巻菱湖に、漢詩を梁川星巖・菊池五山に学んだ人である。また彼の長兄の宇津木矩之允、諱は竣、号は静区は、大塩平八郎の門下生で、大塩事件のおり諫止して殺された。第一期の人々は激動期の波乱のしぶきを被る事が常態でもあった。文人は韜晦した仮の姿であり、漢学者の本領が沈潜している。それは第二期の人も本質的には変わらない。

文人の漢詩作成には同人との作詩紀行や文会や茶会が弾みになることもあるが、最も大きな原動力になったのは漢詩文の結社である。藩校を経営したほどの旧大名領地には概ね漢詩人の結社があった。正岡子規も松山の結社で腕を上げた。熊本・松江・広島など。現在の歌壇俳壇と同様であった。以下に、たまたま属目した機関誌を紹介することにする。

『明治詩文』、明治一七年、例言、大来社。編輯兼発行人、佐田白茅（筑後久留米の人。東京栃敷町壹丁目二番地寄留）。

大来は森槐南。

『善我一篋』、明治一七年七月～明治一九年一月（?）。

『文明新誌』、明治一五年～?、文明新誌社（栃木県下都賀）。社主森定吉。

『東海詞藻』、明治一八年一〇月～?、総南社（上総）。社主兼発行人、三木華陽。

『昭代詩文』、明治二一年一二月～?、昭代詩文社。編輯

兼発行者、綿引泰。

『花光月陰』、明治三二年六月～昭和一七年一月（?）、

花月社（東京。名古屋支社）。編輯兼発行者、牧野茂。

『随鷗集』、明治四一年五月～昭和一七年一月（?）、随

鷗社。主幹大久保達。後に土屋通豫。主な漢詩人を顧問に網羅している。

『大正詩文』、大正四年一月～大正一五年七月（?）、

雅文会。発行兼編輯者、日下繁。

『雅声』、大正一〇年～昭和一〇年二月（?）、雅声社（名

古屋市）。編輯兼発行者、辻市治郎。

『漢詩春秋』、大正一二年三月～昭和一六年一二月（?）、

声教社（神奈川県逗子）。編輯兼発行者、上村才六。

『以文会初集』、昭和六年六月～?、以文会（東京）。以文

会代表者兼発行者、館盛鴻。

『別才集』、昭和一四年九月～昭和一八年一〇月（?）、

別才吟社（大阪市）。編輯兼印刷発行人、野間政。顧問、

上村才六。

『昭和詩文』、昭和一二年一〇月～昭和一九年一月（?）、

雅文会。国分青磚庵主宰。編輯兼発行者、荒波市平。

『雅友』、昭和二六年五月～昭和四六年五月（?）、雅友

社（東京）。編集兼発行人、今関寿麿。

『東華』、昭和二四年四月～昭和三三年三月（?）、芸文

社。編輯兼発行者、土屋久泰。

漢詩文結社のごく一部である。現在も持続している広島
の漢詩文結社の事はあえて取り上げなかった。広島以外に
も、漢詩文を現代文学の一表現としている結社があるに違
いない。これまでに漢詩文の結社が調査されることがな
かったのは、近代文学の一翼として漢詩文を位置づけるこ
とに熱心でなかったからである。和文の小説・随筆・詩・
和歌を中心に取り上げながら、文学としての漢詩文運動の
熱量の大きさを等閑視してきたのは、日本文学研究者が、
漢詩文を読解し鑑賞する、漢学の素養がなかったからであ
る。漢詩作品をとりあげるにしても、夏目漱石の場合が象
徴するように、せいぜいが和文作家の余業としてみるだけ
であった。漢詩文の作品を主座にすえた近代文学史が待た
れる。

四 もう一つの近代史

これまでの近代文学史は和文中心の近代史であった。国
学の近代史であったとも言える。それは一九世紀に国際的
に、特に西欧で展開されたナシヨナリズム運動が日本に波
及して展開されたのである。漢詩文は漢字文化圏における
国境を超えた、その意味におけるインターナシヨナルな表

現手段をとった国際文学運動であった。それに対する反措
定として、日本固有の表現様式による文学運動の表象とし
て国学運動が提唱され、国史・国文・国語が殊更に顕彰さ
れた。さりながら歴史の実情を無視し得ないがために、教
育の現場では、漢文が国語と並んで教授され、併称されて
国漢と略称された。

日本が歴史時代に入ったのは、日本人が大好きな三国志
『三国志演義』の時代である。『三国志演義』の愛読者は日
本の戦国時代の英雄物語を読む気分で見ている嫌いが
あるが、考えて見ると、日本の卑弥呼の時代である。全身
入れ墨をして穴蔵生活をしていた時代である。中国史の折
り返し点に当たる。その意味では日本史は中国史の半分で
ある。何を言いたいのか。日本は漢字文化圏の中で歴史時代
に入った。その時点における落差を時間に置き換えるなら
ば二千年の開きがあった。漢字による万葉仮名はもとより、
漢詩文という表記に託して文学も思想も記録されたのは、
時運としては蓋しやむを得なかった。自前の大和言葉を象
形文字から考案する暇を与えられなかった。というよりは、
漢字がもつ表音機能を拝借できたことが、熱量の節約にな
り、追走して日本文化を醸成することを可能にさせた。紀
貫之の『土佐日記』の表白を待つまでもなく、漢詩漢文が
正規の表記方法であった。長いこと日本における正統文学

とは漢詩漢文であった。公共的に大事なことは漢文で書くことが正統な表記方法であった。

明治期に民族主義が勃興して和文の作品が国文学という名称を与えられて国学に位置づけられると、漢詩漢文学は徐々に徐々に脇においやられる(中村真一郎)的論がある。『漢文教室』所載。この真つ直中で高等教育機関の中に国文学が設置された。青木玉さんが日本女子大学の国文学科に合格したことを祖父の幸田露伴に報告すると露伴は「和文学には読むほどの作品はないがな」といったという(『帰りたかった家』)。もちろん幸田露伴は和文学を読破しながら、正統文学はあくまでも漢詩漢文の世界であるという自覚である。露伴の作品はほとんどが口述であったから和文である。しかし、読書の世界は圧倒的に漢学の世界であった。露伴に特有の事ではない。当時の知識人の常態であった。操觚界の主流が漢詩文の使い手であっただけではない。江湖界もまた漢詩文に堪能であった。表記がもろに漢詩文でなかったにしろ、漢文体の和文、漢文書き下し文体が基調である。単に文体が漢詩漢文であったというだけではない。文章を作る側も読む側も漢学の基礎知識を前提にして文章世界が仕上げられていた。現場では漢詩文の作者・鑑賞者・愛好者がごまんと存在していたのである。和文の近代史とは別に漢詩文の近代史があった。日本文化史は二本

立ての表記で記録された。丁度、国語辞典と漢和辞典がセットになって日本語辞典が成立するのと呼応する。近代以前のことであれば漢詩文が表記の主流であることは承知されているのに、昭和前半期までは漢詩文の文化史が厳として大きな流れであったことを一般の人々は元より、研究者も忘却してきた。

五 明治・大正・昭和前期の漢詩文の盛行

新聞の文芸欄から漢詩漢文が消えたのは昭和後期(昭和二年以後)の事である。江戸時代は檀家・寺請制に象徴されるように、仏教が制度の思想であった。江戸時代の仏教は新仏教を生む力を喪失した。儒教は制度に抗議する思想であった。『大日本帝国憲法』『教育勅語』下(第二期)では儒教が制度に組み込まれて大政翼賛の機能を果たすことになる。抗議する思想としての役割を果たしたのが民権思想に代表される西学(西洋学)であった。『日本国憲法』下(第三期)では西学の民権思想が制度の思想となり、漢文文脈の世界は前近代的封建的思想であると烙印を押された。漢学者が自信を喪失した時代である。韻文学(漢詩)・散文(漢文)の表現様式として漢詩漢文を採用する文学者は激減する。新聞の紙面に漢詩漢文の作品が掲載されな

くなったのはその現れである。このような時潮が漢詩漢文に對する輕視無視を助長した。第三期の評価を明治・大正・昭和前期まで遡つて適用してしまい、漢詩漢文の世界をそれ自体として史実に即して調査・整理し、理解・評値する氣運を帳消しにした。

第二期には、例えば、中江兆民の『民約訳解』は西学を漢訳して東洋世界に紹介した。漢訳聖書・聖教要理・社会科学書・自然科学書も漢訳されて普及した。漢訳されたのは翻訳書ばかりではない。日本人の著書も漢文で著されることがあつた。文語の世界は漢文・書き下し文体が常態であつた。清国・中華民国の知識人が西学を学ぶにためは、日本学を学ぶのが捷徑であると称揚した理由はここにある。第二期のもう一つの特色は、漢詩漢文の著作がおびただしく刊行されたことである。江戸時代に木版印刷された漢詩の著作の分量よりも、第二期に木版・活字印刷された漢詩漢文の著作の分量としてははるかに多かつた。実は、第二期に刊行された漢詩漢文集の基礎調査が行き届いていないので、推測にすぎないのだが、小生の実感である。以下に参考までに、氣が附いたものを紹介する。

木下彪『明治詩話』、一九四三年、文中堂。

三浦叶『明治年間における漢詩文集上梓年表』、謄写、

一九六五年。未見。今、次の『明治漢文学史』の巻末

に「附録 明治年間における漢詩文集年表」として収める。

『明治漢文学史』、汲古書院、一九九八年。

『明治の漢学』、汲古書院、一九九八年。

大東文化大学図書館『大東文化大学図書館所蔵・市川任三先生寄贈圖書目録・明治以来漢詩文集』、「跋」市川

任三、全一八一頁。和装本三〇四七冊、洋装本四六〇

冊、刊行年代順、一九九二年。

二松学舎大学二一世紀COEプログラム(高山節也主幹。

町泉寿郎主任)、『江戸明治期漢詩文集』

所謂文学大系に編纂されたものとしては、次のものがある。詩文が収録されているが作者は漢詩文の世界に踰躋したわけではないので、人物を調べるときには大いに参考になる。

『明治漢詩文集』神田喜一郎編、明治文学全集六一、筑

摩書房、一九八三年。漢詩二二一人。漢文三六人、の

べ一四六人の作品を収める。巻末に「明治詩壇評論論」

「明治詩歌評論」大江敬香、「明治詩壇展望」辻揆一、

「明治の漢文」三浦叶。また所収漢詩文人に「略歴」

「明治漢詩文人雅号一覧」(中村忠行)を収める。

明治期の著者は漢文で表現することが常態であつたから、この明治文学全集には漢文著作が数多く収録されている。

『新日本古典文学大系』岩波書店には『漢詩文集（明治編）』『漢文小説集』が編まれている。

大正・昭和初期に刊行された漢詩文集は未調査である。

神田喜一郎は『明治漢詩文集』の「編集後記」の中で、「明治時代は、漢文はともかく、漢詩は空前の発達を遂げた。その作品も極めて多い」「いつたい明治の漢詩は、前にも述べておいたが、日本に漢詩あつて以来、空前の発達を遂げたものである。殊に後半期、細かにいうと、明治二十年から三十七、八年に至るまでの間であるが、その間が著しかった」という。その後は著しくはなかったにせよ、漢詩漢文は著しい分量が刊行された。学者文人は元より、政治家・軍人・経済人・素封家・社会活動家など、功成名を遂げた人は、漢詩なり漢文なりの著作を刊行するのが処世の慣行であつたようである。縦覧すると、作品としては月並み漢詩であつたり、思想内容に獨創性の希薄な漢文であつたりすることが多い。文学作品とか思想内容を表現方法と思想内容の独自性という視点から見るときには、さして高く評価することのできないものが多いことは事実である。しかし、大量に創作されるときには避けがたい現象であろう。例えば和歌は八代集が高峰なのであるが、作品の数は江戸時代の方が圧倒的に多い。その傾向は近代は一層著しい。この潮流の総熱量は無視できない。漢詩は思

想史の研究対象にはすぐにはなりにくいかも知れないが、漢文著作は漢字を基礎教養とした当時の思想家たちが「正統」な表現様式と自覚して採用した文体なので、十分に研究対象になりうる。もう一つの近代史として、漢詩漢文の著作に関心を注ぐと、これまで等閑視されてきた世界が眼前に姿を現すことになろう。

神田喜一郎博士も『明治漢詩文集』を編集した際に苦心した一因として、これはと思う優れた漢詩文の作者の作品集・著作集が刊行されていないことを挙げておられる。発表誌を博搜して補われた。その上には実は未発表原稿が眠っている。依田学海の漢文日記が今井源衛博士によつて発見されたのはつい近年のことである。未刊行の自筆写本の活字起こしが待たれるのだが、それがどこにどれほどあるのかさえ、未解明である。近代の漢学はようやく開拓される時が来たのであろうか。

（東洋大学教授）